

# 葛城天狗

観世弥次郎作

ワキ 山伏

シテ 天狗

ツレ 役行者

地は 大和

季は 秋

ワキ次第 「法の為めにと篠懸の。く。山又山を分けうよ。

詞 「是は峰入先達の客僧にて候。此度又国々の山伏達を伴なひ。唯今峰入仕り候。

道行 「葛城や。高間の峰の朝ぼらけ。く。花かと思えて白雲の。行方はるけき唄つたひ。なべて訪ふべき旅にやは。我は法にとそみかくだ。苔の莖もいとほじや。く。

ワキ詞 「如何にかたぐへ申し候。今夜はこの処に通夜申し。心静に勤めをはじめうずるにて候。

シテ 「登々たる山路いづれの時か尽きん。決々たる溪泉到る所に聞く。風葉声を動かして山犬吠ふ。わづかの松火秋雲を隔つ。あな心すごの山洞やな。

ワキ詞 「我観念の眼の前には。三密の月すみやかにして。寥々と有る折節に。忽然と来る者を見れば。さも不思議なる人体なり。

シテ詞 「御身いくばくの法力を得。かばかりの慢心を具足

せし。其妄念はいかならん。

ワキ「さては心得たり。我行力を妨げんとて。魔軍の靈鬼来りたるな。愚かなりとよ法性の。月は曇らぬ山陰に。頭はれ出づる名を名乗れ。

シテ「是は此山に年経て住める。大天狗の眷属なり。まづ此由を師匠に申さん。其程はこゝに待ち給へと。

地「夕べの雲も冷ましく。く。嵐はげしき高嶺より。らうせいのかうしやうにて。帰れといへば谷

峰も。響き渡れる山彦の。呼べば答へて失せにけり。く。(中入)

地「山河草木震動し。風は木を折つて盤石を崩す天狗だふしに。心も乱るゝばかりなり。

後ジテ「抑是は。此山に年経てすめる大天狗なり。

地「不思議や高嶺に吹き乱す。く。嵐木枯うづまくと見えしが。頭はれ出でたる大天狗の。嘴足剣の刃の如くにて。両眼日月に異ならず。

ワキ「旋陀摩訶嚕遮那。娑婆多耶吽多羅吒干給。

地「行者の加持力隙もなく。く。揉みかけ責めかけ祈り給へば。其時岩屋は鳴動して。大石左右へ開くと見えしが。おのく眷属二行に座して。役の行者は顕はれたり。

行者「汝知らずや我は是れ。今末の世に至るまで。仏法を守護し衆生を守る。開山役の優婆塞なり。

地「大天狗は是を見て。く。驚き高嶺に登らんとすれども。伎楽童子は追つ詰め給ひ。散々に打ち伏せ苦を見せ給へば。梢にすがり。遥かの谷に下りけるを。

行者「行者は御杖を取り直し。

地「汝知らずや神国たり。など仏法に妨げをなすと。怒り給へば今より後は。仏法を守護神となるべしと。約諾堅き岩根を翔り。翔り行けば。優婆塞は眷属を伴なひ給ひて。又巖窟にぞ入り給ふ。

底本.. 国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第二輯』大和田建樹 著